

弘前大学
広報誌

ひろだい

vol.
10
2007.11



特集

進化する弘前大学

先進の活動をする弘大組織レポート

地域共同研究センター

国際交流センター

弘前大学出版会

[シリーズ] 花開く研究

エネルギー産業の

創出・振興に協力しながら

地域雇用と産業の活性化に貢献

〈南條宏肇 大学院理工学研究科長〉

弘前大学施設紹介

看護職者の教育力開発支援センター

[学内トピックス] 話題の広場から

青森市と地域連携事業に関する

包括協定を提携 他

地域共同研究センター10周年

産学官金の連携で地域産業の発展に貢献する 地域密着型シンクタンク

「シーズを育み、ニーズに応じて開花」。弘前大学の「地域共同研究センター（CJR）」（Center for Joint Research）は今年4月、設立10周年を迎えました。県や市町村、金融機関などとも連携しながら、地元産業界のニーズの把握、共同研究のためのシーズ（種子）の育成に努め、企業とのさまざまな研究協力の推進と、地域への貢献に取り組んできました。これまでの歩みと成果を、内山大史センター長事務取扱（准教授）に聞きました。

個人対応型から組織対応型に

——地域共同研究センターは平成9年4月の設立。内山大史センター長事務取扱は、設立初期からのスタッフとうかがいました。

設立当初は、併任の田尻明男センター長（理工学部教授）と併任の専門員（総務部）と私の3人でした。私は平成10年4月に着任しました。専任教員としては、私が初代になります。第2代目の加藤陽治センター長（教育学部）時代を経て、現在のスタッフは、非常勤や学外からのスタッフも含めて約30人。さらに、学内の社会連携課、知的財産創出本部とも連携をとっています。（図1参照）

——センター設立の目的は。

設立の前年、平成8年1月に本学は、研究成果や情報を地域に提供し、企業が直接大学に相談できる場として「科学技術相談室」を設置しました。「敷居が高い」といわれていた大学に、企業のみなさんが気軽に相談できる場を設けたのです。センターはこれを、さらに充実するために生まれました。目的は「産学連携」です。

設立当初は、全国的に各大学の共同研究件数のみが評価の指標として取り上げられたため、本学は正直苦戦しました。地域を取巻く環境も、従来工学部を中心に進められていた「産学連携」の性格も、脆弱な産業基盤しかもたず、理工学部も

生まれたばかりの本学にとってまさにゼロからの、いや、他大学に比べるとマイナスからの出発でした。この十年間大きく変わったことは、策定した「産学官連携ポリシー」（表1参照）の中にあります。中でも「組織としての産学官連携体制を整備」することを強く意識しています。まだまだ途上ですが、大学教員個人対応型から、大学が組織として責任を持つ大学組織対応型に移行したいと考えています。本気で共同研究をされる企業は、大学の教員であるからこそ信頼しています。

「産学官」から「産学官金」に

——当初の「産学」または「産学官」は、「産学官金」への連携に広がってきていますね。

平成16年4月1日に本学は国立大学法人になり、教育、研究に次ぐ第3の使命として地域貢献を掲げ、それまで以上に地域貢献に取り組んでいます。産業界のニーズを把握し、大学の研究シーズ、つまり大学が蓄積してきた知の資源を、企業の方々に活用していただくことで、地域の産業振興、地域振興につなげていこうということです。まず「官」の捉え方ですが、これは国レベルを指すことも、地域の自治体等を指すこともあります。今の話では地域の自治体等という意味で話を進めたいと思います。

企業の方々が新技術や新商品を開発したり、導入していく時に、自分たちの力だけではなかなか難しいところも出てきて、県や市町村の支援を得たり、補助金制度などを活用しなければならぬという状況がありました。そういう中で、官に求められる役割、責任がだんだん大きくなってきたのです。また、官の側にしても、自分の県や市町村に新しい技術をもった企業がいってくれて、発展してもらえば、地域も盛り上がっていく。そういうことから官も力を入れてくれるようになりました。

「金」は金融機関等のことですが、ならば「金」も「産」の中に加えて考えていいのではという意見もあります。将来的にはそうなると思います。でも、私は今の時点では「金」を別に考えるべきだと思っています。なぜなら「産学官」ということで動いてきたのですが、新しい技術を使って新しいものを開発するところまでたどりつけても、さてそれをどうやって市場に出していくかとなった時に、お金の問題に直面するんですね。最近はいろいろなファンドなどもできているのですが、特に小さい企業さん、ベンチャー企業にとって資金のことは切実です。その意味でも「金」に求める役割が増してきているのです。さらに重要なもう一つの意味で「金」の役割は注目を集めています。地域企業のもつ独自の技術、企業の悩みも含めて一番身近で接していたのは信用金庫であるとか地方銀行なんです。これらの機関は企業と大学間のコーディネータ的な役割を果たす大きな力として期待されています。本学も県信用金庫協会さん、地方銀行さんとの連携を進めています。

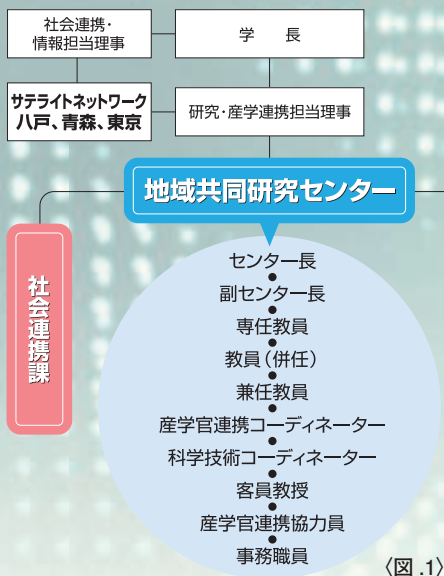
独自の取り組みに高い評価

——設立からこれまでの10年をふり返って、実績をどのようにとらえていますか。

本学の「地域共同研究センター」は全国の国立大学でも45番目ぐらいの設立で後発でしたが、最近では、独自の取り組みが増え、その全国初とか全国2番目というプロジェクト事業等に対し全国から高い評価を受けています。（表2参照）

例えば「プロテオグリカン応用研究プロジェクト」は文部科学省の都市エリア産学官連携促進事業（連携基盤整備型）に採択されました。一般に、この事業に研究者が参加するという意味で関連する大学は数多くあります。しかしそれらと大きく違うのは、国立大学が中核機関として採択されたという点で、全国で2番目の例です。中核機関というのは、研究

弘前大学の産学官連携体制



(図.1)

〈表.1〉弘前大学産学官連携ポリシー

1. 自由な発想に基づく基礎的・創造的な研究および社会的要請に基づく研究を推進します
2. サテライトネットワークを含む、組織としての産学官連携体制を整備し、主体的かつ透明性の高い産学官連携を展開します
3. 知的財産の創出、保護、活用を通じ、社会への説明責任を果たします
4. 地域産業振興を視野に入れた、学部横断的な研究プロジェクトを積極的に組織・支援します
5. 産学官連携に関わる人的および組織的ネットワーク形成を積極的に推進します
6. 産学官連携活動により得られる成果を本学の教育、研究の促進に役立てます

〈表.2〉主なプロジェクト事業

- 都市エリア産学官連携促進事業 (文部科学省)
「プロテオグリカン応用研究プロジェクト」
(連携基盤整備型) (平成 16 ~ 18 年度)
「QOLの向上に貢献するプロテオグリカンの応用研究と製品開発」
(一般型) (平成 19 ~ 21 年度)
- 地域新生コンソーシアム研究開発事業 (経済産業省)
「グリコアルブミン値の無侵襲型携帯用光測定計の研究開発」
(平成 17 ~ 18 年度)
- バイオマス生活創造構想事業に係る技術開発委託事業 (農林水産技術会議事務局)
「糖質資源としてのリンゴ搾汁残渣の高度リサイクル技術の開発」
(平成 16 ~ 18 年度)



の進捗状況、研究交流会、会計などプロジェクトのすべてを管理し責任をもつということで、これまでは「大学のこれまでのシステムではできないだろう」と言われて、行われていませんでした。この取組みは今年度、あらたにステップアップした同事業（一般型）にも採択されました。

さらに「グリコアルブミン値の無侵襲型携帯用光測定計の研究開発」は、経済産業省の地域新生コンソーシアム研究開発事業で、全国の国立大学としては初めて本学が管理法人として採択されました。管理法人についても先の中核機関と同様の役割です。

また、平成16年4月に設立された「コラボ産学官」（本部・東京）には、その設立構想・準備段階から深く関わりました。コラボ産学官は産学官連携支援組織で、加盟する全国の大学と首都圏企業の共同研究、技術開発の仲介役を務めています。平成17年10月には、コラボ産学官の地方支部第1号として青森支部も発足しています。

加えて本学の立地する地域振興への取組みもあります。平成17年秋から始めた本学独自の弘前大学マッチング研究支援事業「弘大GOGOファンド」も全国から注目を集めています。これは、青森県の産業振興並びに地域振興を目的とし、地元企業へ研究資金、人、アイデアなどを支援するというものです。また平成17年に弘前市と共同で立ち上げた、産学官連携組織「ひろさき産学官連携フォーラム」は、企業、大学、公的研究機関、行政、金融機関等による連携・交流組織で、そのネットワークは大きな力になっています。

と、いくつかの例を話をしましたが、これら全ては大学として主体的に動き、大学として信頼される関係を築いていきたいという強い思いが根底にあります。学内的には学術情報部社会連携課スタッフの取組みは高く評価されるべきだと考えます。また、我々の信念に呼応して真

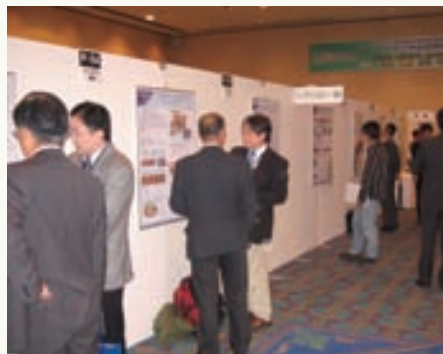
の連携関係を構築していただいている学外の連携機関の方々にも深く感謝しています。

——今後の目標は。

本学の取組みが、地方大学のトップとして評価されるように頑張っていきたいですね。また、連携する知的財産創出本部を拠点に、弘大発の技術を全国に発信し、契約に基づいた形で全国の企業さんに使っていただく。それが最終的に、その企業さんの成功につながり、その地域が豊かになり、国の経済回復の一助になっていくことに貢献していければと思います。地元の青森県と全国展開の2つの軸で考えています。

——最後に11月7日に開催された「見えて、聞いてみて、触ってみて、弘前大学」の反響はいかがでしたか。

これは、本学の研究活動、産学連携活動を広く地域に公開するイベントですが、今年で4回目になります。昨年、本学は青森県と包括的な連携のもとさまざまな分野で協力する協定を締結しました。その1周年記念事業としても位置づけました。約250名の方々が会場を訪れ、本学への理解を深めていただき、たいへん盛り上がりしました。



11月7日にシティ弘前ホテル3階を会場に開かれた産学官金連携合同フェア「見えて、聞いてみて、触ってみて、弘前大学」。研究シーズ展示・発表、講演、連携取組事例発表がおこなわれた。



弘前市の文京町キャンパスの中にある地域共同研究センター

国立大学法人弘前大学 地域共同研究センター

〒036-8561 弘前市文京町3
TEL.0172-39-3176 FAX.0172-36-2105
URL.<http://www1.cjr.hirosaki-u.ac.jp>



地域共同研究センター
内山 大史 センター長事務取扱 (准教授)

昭和40年11月、黒石市生まれ。弘前高時代はバンドを組み、ドラムを担当。「カラオケでは浜田省吾の歌をよく歌います」

生まれ変わった国際交流センター

学生・教員・職員・地域の四領域に重点支援

日本文化の理解と体験のために、弘前ねぶたまつりにハッピー姿で参加した留学生

留学生の受入れ・派遣などを中心に活動を続けてきた「留学生センター」が本年4月1日に改組し、新しく「国際交流センター」に生まれ変わりました。

新「国際交流センター」では、留学生の交流だけでなく、教員、職員、地域の交流にまで守備範囲を広げ、さらに充実した弘前大学の国際交流の実現に力を注いでいます。

世界各地の25校の協定校と連携

国際交流センター長の倉又秀一教授（理工学研究科）は、国際交流センター誕生の目的を、「本学の国際交流を、より一層充実させるため」と説明します。

以前の留学生センターでは、主に学生の留学を扱ってきました。新たな国際交流センターは、その活動対象を「学生」に限らず、「教員」「職員」「地域」にまで広げ、それぞれに適した交流支援をしていくことで、弘前大学全体の国際交流事業を、さらに充実発展させていきます。

具体的には、外国人留学生の増加、弘大生の国際交流科目の履修機会の増加、国際交流協定校等との教員相互交流の促進、事務職員を対象とした協定校との業務研修などに力を注ぐとともに、留学生と地域の方との交流の場を提供することなどに力を入れていくことになります。

倉又センター長は、「留学生センター時代にも、教員交流、職員交流などは行われていました。しかし、今回の改組で守備範囲がより明確になりました。これからは、それぞれの領域ごとに、さらに充実した支援態勢を構築していきたい」と抱負を語っています。

国際交流センターは、文京町キャンパス総合教育棟2階に開設されています。

センターでは、国外からの留学生が集まってパソコンを操作したり、本を読んだり、談笑している姿が見られます。倉又センター長のほかに専任教員が5人、事務員が6人の総勢12人の運営スタッフが、その姿をあたたく見守っています。アットホームで、日本人学生も入りやすい雰囲気があります。スタッフは、「留学を希望したり、何か相談したいことがあったら、いつでも気軽にたずねてきてください」と呼びかけています。

ちなみに本学と連携している全学の交流協定校の数は25校、学部間協定が8、国外から受け入れている留学生は19カ国・144人です（数字は10月1日現在）。

以下に、上にあげた4つの領域での主な取り組みを示します。

学生に対して

外国人留学生には

●留学を受け入れています。受入れ人数の目標値は、現在の約40人増の180人程度と考えています（弘大全学生の3パーセント程度）。

●出入国の諸手続きの手伝いから、安心して日本で生活ができ、学生生活が順調に送れるためのすべての支援を行っています。「病気になったり事故にあうこともあります。留学生のための健康保険の補助制度もあるので、そういう手続きも行っています。完全な親代わりはできませんが、スタッフは日本での親になった気持ちで、留学生のサポートに取り組んでいます」（倉又センター長）

●タンデムという制度を設けています。これは留学生と弘大生がペアを組んで、お互いに教え合うことができる制度です。弘大生の参加が少ないので、国際交



流センターのホームページで登録ができますので、ぜひ参加してください。

●いろいろなサークルの学生が先頭に立って、4月と10月に留学生の歓迎会を行っています。

●日本語教育のレベルの細分化を行い、より効果的な授業を留学生に提供しています。

●これまでの受け入れ期間は、半年から1年、あるいはそれ以上の長期でしたが、今後は1、2週間のプログラムも考えていきます。今年5月には、アメリカの協定校のテネシー大学マーチン校が実施している「トラベルスタディ」を受け入れました。日本語教員の引率で日本語専攻の学生6人が、5月31日から6月5日まで来学し、国際交流科目授業に参加したり、弘大生やホストファミリーとの交流を行いながら、日本語や日本文化を学びました。

弘大生には

●留学を希望する弘大生を交流協定校に送る手伝いと、現地で充実した学生生活を送れるように支援しています。

●「留学説明会を開催すると、200人から300人の学生が集まります。しかし、実際に留学する学生は30人を越える程度です。親御さんが心配して留学を許可しなかったり、費用の問題、休学していくことの不安などが、学生たちを思い止まらせる理由になっています。そのため、弘大生の多くが希望する英語の語学研修においても、授業料不徴収で受け入れてくれる協定校を増やしたり、授業料割引の制度を設けてもらえるように働きかけてきました。留学の詳細はセンターのス



アットホームな雰囲気センター



国際交流センター
倉又 秀一 センター長(教授)

1993年から弘前大学の国際交流事業に関わってきた。アメリカの大学・研究所で11年間勤務した経験がある。「留学生が帰るときに『とても楽しかった』と言ってくれたり、帰国して大学を卒業したあとに、弘大の大学院に入るために再び来学してくれたときなどはうれしいし、また種が芽を出してくれたなと思います」



新しく来学した留学生の歓迎会



青森県留学生交流ジャンボリー

スタッフにお尋ねください。若い時に海外で勉強したり生活することは、人生の貴重な経験になるはず。実際に経験した学生たちの多くは、『人生の宝物になった』と評価しています(倉又センター長)

●英語で行われる国際交流科目を充実させ、弘大生と留学生が共に机を並べて勉学する環境づくりに努力しています。

●協定校のチェンマイ大学のあるタイに、弘大生を連れていく1.2週間の「スタディ・ツアー」を計画しています。タイは日本企業が多く進出している国です。英語もかなり通じる国です。現地で日本企業の実情を見聞し、同時に英語を活用する経験を積み、タイの文化を学ぶことができます。

教員に対して

●協定校の交流に関する情報を収集・提供します。

●テネシー大学マーチン校、哈爾濱師範大学などのように長く教員交流が続いている大学があります。

●延辺大学などのように、弘大との教員交流を希望している大学があります。まずは両校の日本語教育の情報交換やカップリングなどを手始めに、協定校との教員交流の拡大を図っていきます。

職員に対して

●これまでテネシー大学マーチン校へ語学研修に行く制度がありましたが、これからはその機会を捉え、協定校の組織や運営を勉強したり、事務の仕事の研修をする手配もしていきます。

●海外での留学フェアや協定校訪問に、職員が参加する機会をさらに広げてゆきます。

地域に対して

●センター独自の「ホームビジット」のプログラムを実施しています。ホームビジットは、留学生が1カ月に1度くらいの頻度で特定の家族と会う機会を持つものです。買物と一緒に出かけたり、料理を作ったりといったことも行われています。ホームステイを負担と感じる日本家庭も多く、また学生も気軽に参加できる

プログラムなので、両者にとっても好評です。

●地域のさまざまなグループやサークル、学校などから留学生を招待したいという申し込みがあります。両者が直接的な触れ合いを持つ、交流の窓口になっています。

このような活動をしている国際交流センターを訪ねてください。



交流協定校の所在地を紹介した手作り世界地図

[弘前大学の交流協定校] (締結順)

- テネシー大学マーチン校 (アメリカ合衆国)
- ボルドー第3大学 (フランス共和国)
- 哈爾濱(はるびん)師範大学 (中華人民共和国)
- 極東総合医科大学 (ロシア連邦)
- メーン州立大学 (アメリカ合衆国)
- ヒッペリオン大学 (ルーマニア)
- トリア大学 (ドイツ連邦共和国)
- 延辺(えんべん)大学 (中華人民共和国)
- ロモノソフモスクワ大学 (ロシア連邦)
- オタゴ大学 (ニュージーランド)
- 鄭州(ていしゅう)大学 (中華人民共和国)
- チェンマイ大学 (タイ王国)

- デブレツェン大学 (ハンガリー共和国)
- サンディエゴ州立大学 (アメリカ合衆国)
- 南ソウル大学 (大韓民国)
- ルーアン大学 (フランス共和国)
- 慶北大学校 (大韓民国)
- サスカチュワン大学 (カナダ)
- 釜山大学校 (大韓民国)
- オークランド工科大学 (ニュージーランド)
- イルクーツク大学 (ロシア連邦)
- ラ・フロンテラ大学 (チリ共和国)
- 京畿大学校 (大韓民国)
- マウント・ロイヤル・カレッジ (カナダ)
- トンプソン・リバーズ大学 (カナダ)

弘前大学出版会 設立3周年の歩みをふり返る



第1号出版の記念誌「津軽の華—弘前大学所蔵ねぶた絵全作品—」
(津軽の華制作委員会編/平成16年7月28日初版発行)

弘前大学出版会は今年7月、誕生から3周年を迎えました。出版会設立には遠藤正彦学長の強い熱意がありました。その思いをうけとめて活動をつづけてきたスタッフの活動と、準備段階から今日の軌道に乗るまでの歩みをふり返ってみました。

遠藤学長の熱意でスタート

「弘前大学に出版会をつくらう！」

弘前大学出版会の歴史は、学長に就任まもない遠藤正彦学長のこの一言から始まりました。平成14年春のことでした。

同年7月4日に第1回研究推進委員会が開かれ、現出版会編集委員長の真下正夫教授(当時・理工学部)が責任者となって、4人から成る出版事業ワーキンググループ(その後、弘前大学出版会設立準備委員会に発展)が発足しました。

遠藤学長の出版会にける思いは熱いものでした。

「本学教員が心血を注ぎ年月を費やした研究成果が、たんなる報告書程度にしかまとめられず、一部の人にしか読まれていないのは忍びない。レイアウトを変え、第3者のピアレビューを受け、ISBN(国際図書標準番号)の付された書籍として出版されたらどうだろう。将来にわたって何倍、何十倍もの研究者に読まれ、時には予想を超えたはるかに高い評価が与えられるかもしれない」

遠藤学長は、本学や本学関係の研究者の書籍を全国、否世界の図書館書架に並ばせることで研究者自身の評価と共に、弘前大学の研究そのものも高まっていくはずだと期待しました。それは必ず、法

人化後の大学生生き残り策の一つになると考えたのでした。

立ちふさがった資金の問題

真下正夫教授は、遠藤学長の思いを強く受けとめ、先頭に立って調査に動きまわりました。「東京大学出版会のように歴史のある出版会は参考にならないと思い、まず設立して数年程度の三重大学と東京学芸大学に行きました」

また、しっかりした運営をしている出版会だけが加盟できる大学出版部協会にも視察に行きました。しかしその視察の結果は、課題の多さを見せつけられるものでした。

「まず分かったのは、三重大学や東京学芸大学の真似はできないということでした。出版会の運営には、出版事業を分ける人間と資金が必要でしたが、一番切実なのはお金の問題でした。実は本学の中でも、出版会立ち上げに反対する人は多かったのですが、その理由は『赤字が目に見えている』という、お金の問題でした。それは努力や気力、情熱だけではどうにもならない問題でした」

三重大学は、出版会を株式会社にして教員などに株を購入してもらい資金を調達していました。東京学芸大学は教員が会員になり、会費を徴収して運営していました。当時、東北で唯一出版会を持っていた東北大学の事情も調べました。東北大学では、長い歴史の中で培ってきた後援会組織があり、そこから資金を集めていました。真下教授は、そのどれも弘前大学では無理だと考えました。地域から寄付を募ることも考えましたが、大学

の記念事業などで協力をしてもらっていたので、これ以上の寄付もお願いできませんでした。

「教育研究活動の補助活動」と位置づけ

行き詰まっていた局面を打開したのは、平成16年4月1日の国立大学法人への設置形態の変更でした。それまでの国立大学時代は、大学組織の中に事業性のあるものを設置できませんでした。それまで先行していた東京大学も他大学も、学外に任意団体、財団法人、株式会社など外郭団体の形態で運営していました。しかし、法人化して独立した「人格」を持てば、今まで認められなかったことが可能であることが分かりました。真下教授は、「これならいける！」とひざを叩きました。真下教授の提案は研究推進委員会でも承認されました。これをうけ、平成16年6月28日、弘前大学出版会は設立、学内組織として発足することができました。

真下教授は、大学の出版会には、大学の教育研究活動の「補助活動とする」場合と「収益事業とする」場合の二つがあるといます。弘前大学では前者の「補助活動」の位置づけで運営されています。したがって「学術的研究成果の発表促進」「各種教科書の開発」「地域に根ざした出版」「啓発的教養書の発信」などが目的になります。真下教授はまた、「弘前大学出版会は、利益を追求する組織ではありません。しかし、安易な赤字は許されません。お金の動きは、著者負担分を除く出版経費は学内予算に計上し、販売に



弘前大学出版会最初の定期刊行物「白神研究」
(弘前大学白神研究会編／平成16年12月20日創刊)

よる回収分は大学に還元、つまり経費を大学にお返しすることになっています」と話します。

プロ集団の組織を目指して

弘前大学出版会の記念すべき初出版は、設立記念誌「津軽の華」で、平成16年7月28日に刊行されました。組織がまだ準備委員会の当時から企画を進めていたもので、内容は本学が弘前ねぶたまつりに参加したあとに、大学の財産として長く保存していたねぶた絵図の写真集でした。これまで2刷で計4500部を印刷、その売上げは黒字になっています。

弘前大学出版会は今年5月25日に「大学出版部協会」に加盟することができました。7月13日には「出版会設立3周年・大学出版部協会加盟記念」の講演会も開催しました。今年10月25日に出版された「Dr.中路の健康医学講座」(中路重之著)は、出版会にとって35冊目の本になりました。また、「津軽はおもしろいシリーズ」や「弘大ブックレット」などの自主企画も立て、意欲的に事業に取り組んでいます。

組織の立ち上げからずっと今日まで関わってきた真下教授は、「出版会業界は厳しい。だから、出版会は弘前大学内のベンチャー企業という意識でやっています。これからさらに継続発展させていくには、出版会のスタッフがそれぞれ企画・編集・出版・営業のプロになっていかなければいけない。そのため、事務局の方々などに専門職制度を導入するなど、体制固めも考えていかなければならないと思う」と語っています。



出版会編集委員長の真下正夫教授が編集に携わり、そのおもしろさを知るきっかけになった専門書(講談社、培風館、共立出版)。この出版作業のしばらくあとで、弘前大学出版会の立ち上げに参加することになった



7月13日の「出版会設立3周年・大学出版部協会加盟記念」で講演する遠藤正彦学長＝創立50周年記念会館「みちのくホール」



弘前大学出版会編集委員会
真下 正夫 委員長(大学院理工学研究科教授)

民間会社(東芝)で勤務した経験もある。「出版事業は、本当にこの仕事を愛し、情熱をもって取り組む人の組織で運営しなければ成功しない」

弘前大学出版会

〒036-8560 弘前市文京町1番地

TEL.0172-39-3168

FAX.0172-39-3171

URL.<http://www.hirosaki-u.ac.jp/hupress/>

平成19年度「弘前大学ドリーム講座」を実施

弘前大学では、高校生に「学ぶこと」の魅力、学ぶことを通じて将来の夢について考えを深める機会を提供する事を目的として、青森県内の高等学校を対象に「弘前大学ドリーム講座」を実施しています。この講座は、各高校毎におよそ8名程度の研究分野の異なる教員が赴き、生徒たちがその中から自ら希望する分野の講義を選択して受講するというもので、平成19年度は9月から12月までの間に、7校の高校で実施します。受講した生徒たちは、日頃の授業とは違う大学の講義の雰囲気に興味津々の様子で耳を傾けており、講座実施後には「大変熱心に教えてくださって、自分のためになりました」「先生の経験談がとても参考になりました。これからの進路に役立てたいと思います。」等の感想が寄せられています。



平成19年度実施講座（予定）

所 属		講 師	講義題目
弘前大学長		遠藤 正彦	医・歯・薬・医療系をめざす人の科学する心を育むことの大切さ
人文学部	文化財論講座	諸岡 道比古	生と死について
	思想文芸講座	山口 徹	文学テキストと精神分析
	コミュニケーション講座	ジャンソン・ミッシェル	フランス語入門
		石堂 哲也	ことばについて考える
		楊 天曦	中国語の楽しみ
		木村 宣美	英語学への招待
	国際社会講座	フルト・フォルカー	「平和学」とは何か
		カーペンター・ビクター・リー	食物と国際社会
		城本 るみ	中国って、どんな国？～現代中国論への誘い～
		齋藤 義彦	ドイツの歴史
		金藤 正直	製品価格の計算方法
	ビジネスマネジメント講座	高島 克史	コンビニの経営
		鈴木 和雄	経済を考える、経済学を学ぶ
	経済システム講座	中澤 勝三	アメリカ経済の過去と現在
山本 康裕		近年における日本経済の現状	
福田 健太郎		利息債権と利息制限法	
公共政策講座		東 徹	理科教育と江戸の科学技術
教育学部	理科教育講座	今田 匡彦	舞踊と音楽
	音楽教育講座	今田 匡彦	舞踊と音楽
	美術教育講座	石川 善朗	工業デザインと工芸デザイン
		石川 善朗	工業デザインと工芸デザイン
	保健体育講座	高橋 俊哉	スポーツコーチ学入門
		本間 正行	スポーツコーチ学入門
	障害児教育講座	松本 敏治	あなたのまわりのちょっと不思議な人たち LD・ADHD・高機能自閉症
		松本 敏治	あなたのまわりのちょっと不思議な人たち LD・ADHD・高機能自閉症
	学校教育講座	平田 淳	教育の現状と課題
		平岡 恭一	心理学—見えないところを見るようにするために
教育実践総合センター	豊嶋 秋彦	対人関係の心理学	
教員養成学研究開発センター	福島 裕敏	めざせ！教育プロフェッショナル—弘大教育学部の新たな挑戦—	
医学部医学科	附属脳神経血管病態研究施設	佐藤 敬	医師を目指す皆さんに
医学部保健学科	看護学専攻	西野 加代子	看護学を学んでみよう
		川崎 くみ子	看護とは
		北宮 千秋	地域を知って自分を知る —健康に目を向けて—
		工藤 せい子	看護学を学んでみよう
		三崎 直子	看護学を学ぼう！
		齋藤 久美子	看護とは —ナイチンゲールは何をした人？—
	検査技術科学専攻	伊藤 巧一	—免疫について学ぼう— 侵略者との終わりなき攻防
	理学療法専攻	對馬 栄輝	理学療法の教育や可能性について
		岩田 学	理学療法と作業療法の教育や可能性について
	作業療法専攻	野田 美保子	人間発達とリハビリテーション
理工学部	数理科学科	榊 真	多変数関数について
	物理科学科	宮永 崇史	光と電子の不思議な話
		高橋 信介	バイカル湖で待つ宇宙からの贈りもの
	物質創成化学科	伊東 俊司	有機化合物の機能と応用
	地球環境学科	氏家 良博	エネルギー—資源の変遷 —石油の次には何が来るか—
		氏家 良博	エネルギー—資源の変遷 —石油の次には何が来るか—
	電子情報工学科	深瀬 政秋	IT技術の基礎から最前線まで
		吉岡 良雄	完全手作りコンピュータで何が出来るか？
	知能機械工学科	佐川 貢一	生きている科学技術に挑戦しよう
		飯倉 善和	衛星画像と地理情報
齋藤 玄敏		自然エネルギーと機械工学	
農学生命科学部	生物機能科学科	大河 浩	植物が地球を変えた？～光合成の科学～
	応用生命工学科	橋本 勝	天然物化学の面白さ
		柏木 明子	遺伝子のオンとオフ ～微生物にも個性がある～
生物生産科学科	佐原 雄二	人の作った環境と野生生物	
講座数 57講座		講師数(延べ人数) 57人	

「研究・開発部門」と「現職者支援部門」の2つで 看護職者の効果的指導方法や継続教育のあり方を研究・支援

患者さんに分かりやすく 病気と予防を説明

「近年、疾病構造が変化し、生活習慣病などが増えてきました。こういう病気は予防できることが多いのですが、そのためには患者さんやたくさんの方々に分かりやすく病気のことを説明したり、上手に指導する能力が必要です。看護職者のそういった教育力のスキルアップの研究や支援などを行っているのが当施設です」

看護職者の教育力開発支援センターの阿部テル子センター長は、このようにセンターの役割と目的を説明します。ちなみに、看護職者とは看護師、助産師、保健師、准看護師の資格をもった人のことをいいます。

センターは、平成17年度に設置されました。組織的には「研究・開発部門」（阿部テル子代表）と「現職者支援部門」（西沢義子代表）の2つの部門に分かれ、阿部テル子准教授（大学院保健学研究科）と西沢義子教授（大学院保健学研究科）の研究室を拠点にしてそれぞれ活動を続けています。

研究・開発部門では、「看護職者の教育的機能を高めるための教育プログラム、教育方法、教育技能評価ツールの研究・開発」などに重点が置かれています。一方、現職者支援部門は「いままさに現場で働いている看護職者への教育の実施と評価」などを行っています。

また両部門は、青森県内の看護職者養成機関の教員に対する教育的支援も行い、看護教育の質的向上を目指しています。

「看護職者の教育力開発支援センター」のある大学院保健学研究科と玄関に掲げられた看板

これまでの取り組みと実績

さて、それでは上記の2部門は、これまで具体的にどのようなことに取り組んできたのでしょうか。阿部センター長が代表の研究・開発部門ではまず、現状把握から始めました。

「現場では、ご高齢でなかなか理解できなかったり、指導そのものを受け入れない患者さんもいて、指導に困難を感じているという看護職者も多くいました。患者さんはそれぞれ生活環境や仕事の状況、考え方もみな違います。看護職者はそのような患者さんに対してそれぞれ試行錯誤しながら、効果的な指導方法を工夫していることが分かりました」

研究・開発部門ではこのような現状を踏まえ、ある特定の有能な人だけがスキルをもっているというのではなく、看護職全体のレベルアップを図るために、教育プログラム、教育方法、教育技能評価ツールの研究・開発に努めています。

西沢義子教授が代表の現職者支援部門では、平成17年度はまず「患者教育研究会」から講師を招いて研修会を開きました。患者教育研究会は、患者教育の研究に情熱を持って取り組んでいる人たちが、いくつかの大学から参加しているグループです。西沢教授は「当日は青森県内の看護職者や看護学生、医学生など約170名が参加して活発な討論が行われました。」今

後はもう少し意図した関わりが必要だと感じた』などの声が寄せられ、みなさんの意識はかなり高まった」と手応えを感じたそうです。

平成18年度は、ふだん現場で行われている指導方法を客観的に見直してみるためにセミナーを企画し、医学部附属病院の看護師を対象に「患者指導のスキルアップに挑戦してみませんか」と声かけをして、参加者を募集しました。これに応募した病棟と連携し、その病棟の看護職者が行っている糖尿病教室と心臓病教室での指導方法を具体的に分析・検討しました。その後、指導案をつくり、それをもとに模擬患者指導を実施。その様子を撮影した映像を分析して、指導実施者と実践部門のメンバーで指導方法についてさらにディスカッションを行い、現職看護職者のスキルアップの実践的な指導を行いました。その結果をまとめて日本看護研究学会で発表しました。

阿部センター長と西沢教授は、センターの取り組みを「総合大学の4年制の中で行われる看護教育を実施している弘前大学ならではの、全国でも特色あるもの」と解説。「センター設置時の条件で3年目となる今年度末に、他のいくつかのセンターと同じように全学委員会でセンターの評価が行われます。その際には、ぜひこれまでの成果を見てもらい、今後の継続につなげていきたい」と意欲を述べています。



「看護職者の教育力開発支援センター」のメンバー。前列中央が「研究・開発部門」代表の阿部テル子センター長（大学院保健学研究科）、その右が「現職者支援部門」代表の西沢義子教授（大学院保健学研究科）。センターの会議では、いいセンターにしていきたいという純粋で熱い思いをぶつけあっている。「私は来年3月で定年退職ですが、夢を託せる素晴らしい後輩たちにめぐまれて幸せです」（阿部センター長）



模擬患者指導実践の様子（左：心臓病教室、右：糖尿病教室）。模擬患者は高等学校（看護）教員を目指している学生です。

弘前大学大学院保健学研究科「看護職者の教育力開発支援センター」

【研究・開発部門】代表
阿部テル子（大学院保健学研究科健康支援科学領域健康増進科学分野准教授）
【現職者支援部門】代表
西沢 義子（大学院保健学研究科健康支援科学領域健康増進科学分野教授）
〈連絡先〉
〒036-8564 弘前市本町66-1
弘前大学大学院保健学研究科
TEL/FAX.0172-39-5941（西沢義子） E-mail:yoshiko@cc.hirosaki-u.ac.jp

青森市と地域連携事業に関する包括協定を提携



調印後、固く握手を交わす遠藤学長(左)と佐々木青森市長

弘前大学と青森市との間で、相互の密接な連携と協力により、社会・経済環境の変化に適切に対応し、地域経済の活性化、地域住民の生活環境の改善等及び将来的に必要なとされる人材育成に寄与することを目的として、都市交通、自然・環境、産業振興、健康・医療・福祉、教育・文化、その他の分野において連携し協力するため、連携協力協定を5月7日に締結しました。

調印にあたって、佐々木青森市長から「現在協力が予定されているナマコ、カシス、リンゴなどの他にも潜在している資源を洗

い出し、本学の持つ知恵を活かしてブランド化・商品化していきたい」との挨拶があり、遠藤弘前大学長から「様々な交流、指導を受け地元に着目し、地元の支持のある大学として発展したい」との挨拶がそれぞれありました。

調印式には、本学から加藤理事(研究・産学連携担当)、三浦理事(社会連携・情報担当)、諏訪田学術情報部長、青森市からは佐藤副市長、米塚自治体経営監、横山総務部長、橋本企画財政部長、小嶋農林水産部長が同席しました。

弘前大学大学院保健学研究科設置記念式典を挙行

本年4月に保健学研究科(博士後期課程)が設置されたことを記念して、9月7日(金)に記念式典を開催しました。

保健学研究科は、高度の専門性を有するとともに、職種を越えたインタープロフェSSIONALワークの実践と未解明のエビデンスの探究・蓄積ができる「自立した研究者の育成」を目的として、「健康支援科学領域」及び「医療生命科学領域」の2領域で構成され、この4月に12人(うち、社会人11人)の大学院生が入学しています。

式典では、遠藤学長の式辞の後、文部科学省高等教育局医学教育課長(渡辺医学教育課課長補佐代読)、青森県知事(佐川健康福祉部次長代読)、弘前市長(時苗企画部企画課長代読)、青森県立保健大学長(上泉副学長代読)から祝辞が述べられました。最後に、対馬保健学研究科長から、保健学研究科の概要説明が行われました。

式典後には、引き続き設置記念祝賀会が

開催され、来賓、関係者多数が出席して盛大に行われました。

祝賀会では、対馬保健学研究科長、佐藤医学研究科長、花田医学部附属病院院長の挨拶、石戸谷弘前大学後援会長をはじめ中村青森県看護協会第一副会長、上野青森県臨床衛生検査技師会副会長、伊藤青森県理学療法士会長、小山内青森県作業療法士会長から、今後の保健学研究科発展への期待が込められたスピーチなどがありました。



遠藤学長による式辞



保健学研究科の概要説明をする対馬保健学研究科長

故大道寺小三郎氏 メモリアルコンサートを開催

みちのく銀行の元会長で、弘前大学同窓会へ多大な貢献のあった故大道寺小三郎氏を偲び、三回忌となる平成19年7月21日に、メモリアルコンサートを開催しました。

コンサートは創立50周年会館みちのくホールを会場に、氏と生前ゆかりが深かったロシアにちなみ、青森県日口交流協会が実施する交流事業と連携して行われました。

開演に先立ち、メモリアルコンサート実行委員長である吉田豊前学長の挨拶があった後、ピアノ浅野清教授(弘前大学教育学部)、ヴァイオリン古川知佳さん、チェロ山形聡さん(弘前大学医学部6年)により、チャイコフスキー作曲のピアノ三重奏曲が演奏されました。

続いて、ロシア少女舞蹈団「ラドガ」と「フラミンゴ」がロシア民謡に合わせて優雅な舞を披露しました。

最後に、ピアノ浅野教授、フルート海治陽一さん(東京シティ・フィルハーモニック管弦楽団)により、プロコフィエフ作曲のソナタが演奏されました。

出席者は、コンサートの演奏や舞踏を楽しみながら、大道寺氏を偲んでいました。



浅野教授、古川さん、山形さんによる三重奏



ロシア少女舞蹈団による舞踏



浅野教授、海治さんによるソナタ

農学生命科学部附属農場創設50周年記念式典及び祝賀会を開催



遠藤学長をはじめとする、記念式典及び祝賀会への参加者

農学生命科学部附属農場は、創立50周年を迎えたことを記念し、7月28日（土）に生物共生教育研究センター金木農場において記念式典及び祝賀会を開催しました。

記念式典では、澁谷生物共生教育研究センター長より附属農場創設から今日までの概要説明が行われ、続いて遠藤学長と高橋農学生命科学部長からの式辞の後、弘前市長（代読：高畑副市長）と全国農業協同組合連合会青森県本部長（代読：藤村副本部長）からご祝辞を頂きました。

引き続き行われた祝賀会では、生物共生教育研究センター村山准教授の挨拶、前生物共生教育研究センター長の工藤啓一氏の音頭で乾杯、来賓から御祝辞の後、祝宴となりました。会場に展示された附属農場創設以来の写真を見ながら、附属農場生産物が原料のお酒と金木農場産アップルビーフを食べていただき、終始和やかな雰囲気でした。

また、本祝賀会は共生広場フェスティバルと併せて行われました。この日はあいにくの雨模様でしたが、フェスティバルでは、金木農場産アップルビーフ・米の即売、焼き肉セットの販売、近隣町内からの特産品

販売、弘大生協の出店があり、さらに金木中学校・金木高校・弘前大学による三味線演奏が行われ、会場は大変盛り上がりました。



金木高校三味線部の三味線演奏



焼き肉を楽しむ参加者及び一般来場者

平成20年度個別学力検査学外試験場のお知らせ

弘前大学では、平成20年度個別学力検査(前期日程)の試験会場を、弘前大学の他に八戸市と札幌地区に設置します(後期日程は弘前市のみで実施します)。

●前期日程(平成20年2月25日、26日)

弘前市／弘前大学	人文学部、教育学部、医学部医学科 医学部保健学科、理工学部、農学生命科学部
八戸市(2月25日のみ)／八戸工業大学第二高等学校	人文学部、教育学部(生涯教育課程を除く) 医学部保健学科、理工学部、農学生命科学部
札幌地区(2月25日のみ)／札幌学院大学	人文学部、医学部保健学科、理工学部 農学生命科学部

●後期日程(平成20年3月12日)

弘前市／弘前大学	人文学部、教育学部、医学部保健学科 理工学部、農学生命科学部
----------	-----------------------------------

問い合わせ先：弘前大学学務部入試課 電話0172-39-3122 E-mail:nyushi@cc.hirosaki-u.ac.jp

平成19年9月期弘前大学学位記授与式を挙行

平成19年9月期弘前大学学位記授与式が9月28日（金）午前10時30分から事務局3階大会議室において行われ、26名（学士21名、修士2名、博士3名）に学位記が授与されました。

始めに、遠藤学長から学位記が授与され、引き続き学長告辞が行われました。

学長は告辞で「グローバル化の波や、地域間格差、少子高齢化、経済財政の低成長等、社会が様々な問題をかかえている中で、皆さんへの期待は大きい。本学で学びそして身につけた様々なことを、十分に発揮して活躍してほしい」と、卒業生にはなむけの言葉を贈りました。



9月期弘前大学学位記授与式

弘前大学大学院秋季入学式を挙行

大学院の平成19年度秋季入学式が、10月1日(月)、事務局3階大会議室において執り行われました。

今回の入学者は2名で、いずれも今年度から部局化(重点化)された理工学研究科に入学します。遠藤学長は告辞で「より研究に重きが置かれることになった大学院で、両君が一層充実した研究生生活を送れるようになるものと期待している。秋季入学者として、誇りを持って充実した大学院生活を送れるよう期待している。」と、2名の入学生にエールを送りました。



大学院秋季入学式

弘前大学“ねぶたまつり”に連続44回目の出陣

津軽地方の伝統行事「弘前ねぶたまつり」が8月1日から7日間行われ、今年も弘前大学のねぶたが参加し、44年連続の出陣を果たしました。

運行には、多数の学生や教職員、外国人留学生、教育学部附属幼稚園及び同附属特別支援学校生徒の他、近隣町会の子供達などが参加し、遠藤学長を先頭に「ヤーヤ

ドー」の勇ましいかけ声と共に堂々と弘前市内を練り歩き、津軽の夏祭りを盛り上げました。

小型ねぶたや灯籠を従えた極彩色の鏡絵「水滸伝一黒旋風李逵奮戦之図」、見送り絵「王嬌枝」を描いた高さ約7mの勇壮なねぶたは、沿道の観客から大きな喝采を受けました。



勇壮な弘前大学ねぶた

オープンキャンパス

8月8日(水)「弘前大学オープンキャンパス」が開催され、雨天にもかかわらず、県内外から高校生、保護者等を含めて昨年度より約600人多い約4,350人の参加者がありました。

各学部では、模擬講義、実験実習体験、何でも相談コーナー、先輩と語ろうコーナー等、多彩な企画を準備し、教員をはじめ学生・院生が専門的な質問に答えるなど、参加者がより有用な情報を得られるような工夫をし、学部のPRに努めました。

また、文京町キャンパスのキャンパスツアーや、総合相談コーナーにも多くの高校生や保護者の方が参加し、入試情報、奨学金制度、学生寮、留学制度、就職情報に関する質問に担当者が説明を行いました。

特別企画「学長と話そう」では、遠藤学長が高校生と懇談を行いました。本学の教育理念などについて説明を受けた参加者は、本学への理解を深めていた様子でした。



「ケンシロウ」がお出迎え（農学生命科学部）



特別企画「学長と話そう」

シニアサマーカレッジ

シニアを対象として地域の自然・歴史・文化・地域課題等、知的好奇心を刺激する様々なカリキュラムを通じて充実のキャンパスライフを体験できる、新たな交流型教育事業として昨年度から始まった「シニアサマーカレッジ」を、今年度も『じよっばる学習！津軽から発信』と銘打ち、JT Bとの共催、青森県並びに弘前市からのご協力により、産学公連携事業として開催しました。

遠くは長崎など、全国から15名の参加を得て、9月3日(月)～9月14日(金)まで2週間の全日程を無事終了しました。

シニアサマーカレッジ卒業式



「亀ヶ岡文化の世界」講義風景

職場体験学習の実施

将来大学教員(研究者)を目指す高校生に対し、教員の仕事を体験し、職業についての理解を深めることを目的として、10月11日(木)に職場体験学習を実施しました。

今回は、青森県立弘前中央高校から応募があり、同校の生徒10名を、本学教育学部及び農学生命科学部で受け入れました。

初めに、佐藤総務課長より大学全体の概要についての説明があった後、本学教育学部の豊嶋秋彦教授(臨床心理)及び秋葉まり子准教授(中学社会科教育)、及び農学生命科学部の杉山修一教授(生物生産科学科)の研究室に生徒がそれぞれ向かい、職場体験を行いました。

実習を終えた生徒達からは、「職場体験を通じて、先生の、生物の研究に対する熱意を感じた。」「専門的に勉強していらっしゃる先生とお話が出来て、大学の先生を目指したい気持ちが強まった。」「進学希望先の事がわかって良かった。臨床心理では興味深い話が多く、面白いし参考になった。」など、今回の職場体験学習が有意義なものであったという感想が寄せられました。



作業の説明をする豊嶋教授

杉山教授の実験室にて

第7回 弘前大学総合文化祭 「華」をテーマに「心に残る学祭を」

市民との交流や、日ごろの研究・課外活動の発表などを目的とした「弘前大学総合文化祭」が10月26日から3日間、文京町キャンパスで開催されました。今年は初日が平日で、雨の降った日もありましたが、それでも来場者は昨年並みの5000人を超えました。総企画数132、ステージイベント15が用意されたキャンパス内には、親子連れから中・高校生、ご高齢の方まで幅広い年代の方々が足を運び、「あらためて地域との結びつきの強さと、本学に寄せられる関心、期待の高さについて思いを新たにできる機会になりました」（米田文彦実行委員長＝教育学部2年）。

今年のテーマには、公募で集めた数々の候補の中から「感動を引き起こす魅力」という意味が込められていて、漢字一文字でだれにも親しみがある」（米田委員長）ことから「華」が選ばれました。地域の人たちが毎年楽しみにしている「よさこい弘大」には、県内各地から8組の「よさこい踊り」チームが参加。メインストーリーでは、まさにテーマそのものの「華」にあふれた感動の群舞が披露されました。また、「エネルギー広場」でのMr. マサックの科学マジックショーや電気作り体験、「楽しい科学」の会場などでは、目を丸くして歓声をあげる子どもたちの表情を見ることができました。総合文化祭終了後、米田実行委員長は「学生たちを信頼し、自由に企画運営をまかせてくれた大学側、そして多



もりあがった各種イベント（三種の人技）



米田文彦実行委員長
(教育学部2年)

学祭終了後、勢ぞろいした実行委員会メンバー。新入生が加わった5月から本格活動を始め、学祭終了まで50回の会議を重ねながら学祭をつくりあげた

面から応援・協力してくれた地域のたくさんの方々のおかげで成功させることができました」と感謝の言葉を述べていました。

弘前大学表彰式を挙行

「弘前大学表彰」は、教育研究活動や課外活動の振興、社会活動等において顕著な功績があった職員または職員で構成される団体、また産学連携、社会連携、教育若しくは文化活動に顕著な功績があった学外者やその団体に対して表彰する制度で、従来の大学表彰と学長顕彰の一本化や、被表彰者に学外者を加える等の目的から、今年度から実施しています。

今年度は5月31日の開学記念日に因んで表彰式を挙行し、4名の教員が表彰されました。

●植木久行人文学部教授

漢詩「福土巖峰漢詩選」及び「石原漢泉漢詩選」の二書を編纂し詳細な注釈と解説を加えて刊行したことにより日本の漢字文化振興への貢献が認められ「漢字文化奨励賞」を受賞

●浅野清教育学部教授

ベートーヴェンのピアノソナタ全32曲の公開演奏をはじめ数多くの演奏会を開催。「音楽をととした生涯学習」「地域における音楽活動」により地域との連携に多大な貢献

●(故)高垣啓一医学部教授

文部科学省都市エリア産学官連携促進事業「プロテオグリカン応用研究プロジェクト」において研究統括を務め、サケ鼻軟骨プロテオグリカンの基礎研究を基に県内外企業と積極的に協同研究を実施し、応用研究への展開を図り、本学の産学官連携事業において顕著な功績があった

●諏訪淳一郎国際交流センター准教授

長年オセアニア地域の研究に従事しており、パプアニューギニア都市周辺村落における現代音楽の聴取と民衆意識についての研究結果をまとめた「ローカル歌謡の人類学」を出版。この研究成果が認められ「日本オセアニア学会賞」を受賞



左から故高垣教授夫人、浅野教授、遠藤学長、植木教授、諏訪准教授

第3回 弘前大学学生「言語力」 大賞コンテスト受賞者一覧

附属図書館では10月27日が「文字・活字文化の日」として制定されたことに因み、知の継承と創造において最も重要な能力である、読む力・書く力・調べる力・伝える力を含む『言語力』を高めるため、学生を対象に『言語力』大賞を実施しており、今回が第3回となります。

審査の結果、今回は残念ながら大賞に該当した作品はありませんでしたが、文学作品部門で優秀賞に選出された三浦 南さん(人文学部2年)をはじめ、下記の学生の作品が選ばれました。

I 文学作品部門（ジャンルは自由）

■ 大賞／該当なし

■ 優秀賞／三浦 南（人文学部2年）「もじおと」

■ 佳作／公平克彦（人文学部3年）「クライモン」

飯田 浩（農学生命科学部4年）「薄暗い中で」

岡田俊彦（理工学部3年）「アンラッキー・ピープル」

和田 大（人文学部3年）「闇色の願い」

千頭 昇（理工学部2年）「みんなのががく」

林 正隆（理工学部2年）「子供の社会」

II 評論部門（テーマの設定は自由）

■ 大賞／該当なし

■ 優秀賞／該当なし

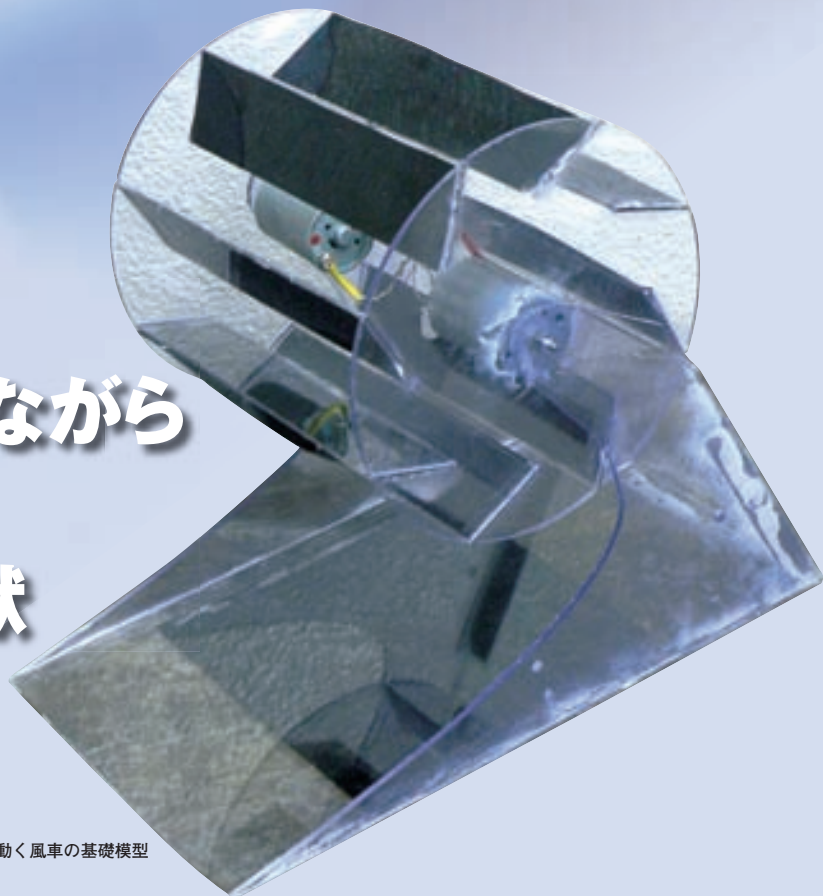
■ 佳作／齋藤 学（理工学部2年）

「主体性を育てる教育とは」

大内衆衛（医学部4年）

「情報・通信技術の進展と主体の消失」

エネルギー産業の 創出・振興に協力しながら 地域雇用と 産業の活性化に貢献



南條教授が共同研究を進めている低風速で動く風車の基礎模型

石油や天然ガス、石炭、ウランなど資源が枯渇していく中で、将来に向かって安定的にエネルギーを確保していくにはどうしたらいいのか。また、温室効果ガスの排出を抑え、地球温暖化を防いでいくためにはどうしたらいいのか。エネルギー問題、環境問題は人類にとって、緊急課題の一つです。理工学部長の南條宏肇教授を中心とした地球環境学科の自然エネルギー研究グループでは、「地球にやさしい」新エネルギーの開発と活用を研究。青森県や県内各市町村、企業などと組んで、エネルギー産業の創出・振興に協力しながら地域貢献の役割を果たしています。

県エネルギー総合対策局 と連携しデータ提供

青森県と東京大学は平成17年11月15日、青森県のエネルギー分野を生かした産業振興について、両者が連携して戦略作りを行っていきと発表しました。平成18年11月には、その取組方針や方策、重点分野、重点プロジェクトなどが「青森県エネルギー産業振興戦略～持続可能な社会の先進地域形成を目指して～」にまとめられました。その中には「県全体の地域振興を実現していくためには、本県が有するエネルギー分野のポテンシャルを有効に活用しながら、必要な技術開発等を通じ、産業を振興していくことが不可欠である」と基本的考えが示され、産業振興を支える知的コア（高等教育・研究機関）として弘前大学が果たす役割の重要性にも触られています。

一方、本学も平成18年11月、青森県と包括協定を締結し、教育・研究、産業・雇用、医療・健康などのほか、環境・エネルギーの分野でも、これまで以上に協力・連携していくことを確認しました。

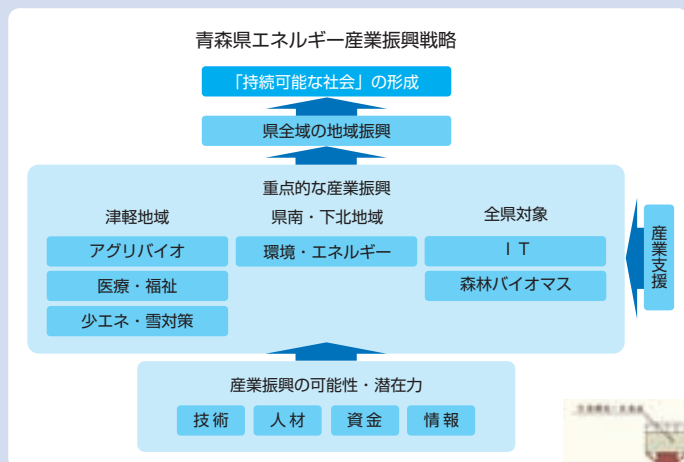
これまで県エネルギー総合対策局などと連携し、エネルギー産業振興のためにさまざまな研究を進めてきた本学理工学部長の南條宏肇教授も、上記の戦略策定に協力。これまでの研究成果やデータの提供などを行いました。

風力、地熱、バイオマス 潮流など幅広く研究

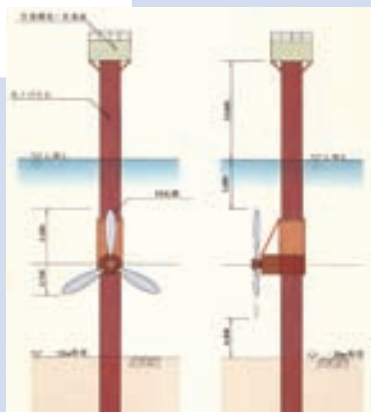
南條教授は、本県のエネルギーの可能性について「各種の原子力関連施設もあれば、全国有数の導入量を誇る風力発電もあります。風力、地熱、木質バイオマスなどは本県の特徴的なエネルギーと言えるし、いままも研究を進めている潮流発電と共に本県でしかできないエネルギー産業の創出に結びつけていくことが期待できる」と話します。

南條教授を中心とした理工学部地球環境学科の自然エネルギーグループはこれまで、まさにこの風力、地熱、潮流発電などの研究に取り組んできました。「地熱エネルギーを利用した貯留型融雪システム」は、地下水を汲み上げるのではなく地熱だけを循環させて、融雪に利用するもので、大学構内で実際に実験施設が稼働しています。また、平賀町がフィールドテスト事業として設置した県内最大の太陽光発電施設のデータ解析や、深浦町の風力開発フィールドテスト事業のデータ解析、下北半島での風況精査のデータ解析も行ってきました。「津軽海峡海流発電基礎研究」は、潮流と海流が合わさった世界的にもめずらしい津軽海峡の流れを利用した発電システムの基礎研究です。理工学部屋上に「風力太陽光発電」の実験装置を設置してハイブリッド発電の研究も行ってきました。

最近ではさらに、一般的に風の弱い都市でも回転し発電可能な、都市型風車の開発を企業と共同で研究を進めたりしています。またこの風車は横に長くでき強風でも回転数が抑えられるので、地吹雪除けの防雪柵に取り付けて標識用発電などへの利用なども考えています。



弘前大学構内に設置された地熱利用融雪システム



津軽海峡に設置計画の340kW海流発電機



南條宏肇 (なんじょう・ひろただ)

大学院理工学研究科長 (理工学部地球環境学科教授)

1971年、早稲田大学大学院理工学研究科応用物理学専攻博士課程単位取得満期退学、東京大学宇宙線観測所共同利用研究員、ワシントン大学客員教授等を経て現職。一次宇宙線、自然エネルギーを専門分野とし、研究テーマは「融雪、熱交換井戸による低温融雪システム」「風力・津軽海峡風況解析」「太陽光平賀町役場太陽光発電システムデータ解析」「海流・津軽海峡発電開発基礎研究」等。

新産業創出に向け、期待を担う 木質バイオマスと地熱利用

さまざまな研究の中で、南條教授がいま、もっとも早く産業化できると期待しているのが木質バイオマスと地熱エネルギーの分野です。南條教授は、県の「あおり型農工ベストミックス新産業創出構想検討委員会」の委員長として昨年3月、三つの戦略プロジェクトを三村知事に提案しました。その中でも自然エネルギーやバイオマス資源活用の重要性を挙げました。

「青森県はリンゴのせん定枝や間伐材が豊富。これを、燃焼度をコントロールできるペレットにして利用すれば、ビニール栽培など冬の農業にも活用できます」

ペレットは、スクリューなどを回転させながら自動的に燃焼器に送り込みます。そのことでペレットの量を調節することができ、燃焼度や燃焼時間も、石油ストー

ブのようにコントロールできるというわけです。

「これだと、ビニールハウスの中に何もボイラーをつくる必要はない。ビニールパイプをハウス内に巡らせて、暖気そのものを出すことも可能。植物には二酸化炭素が必要なので、いいと思うんですね」

南條教授は、五所川原市との「新エネルギービジョン策定」にも委員会会長として関わってきています。その五所川原市にはこのほどペレットの製造工場が建設されました。間伐材などを使う本格的操業は、県内では初めてとのこと。また、地熱については、融雪や冷房に活用できるといいます。

県の「青森県地中熱利用推進ビジョン策定委員会」の委員長も勤めており、「地熱はどこにもあるエネルギーだし、融雪は6度か7度程度の温度でいいので、とても使いやすいと思います」



バイオマス燃料の一つとして注目される「木質ペレット」 全県的に豊富に存在する森林資源の活用にもつながる

実働部隊の先頭として 構想の実現化をリード

新エネルギーに関する研究はいま最も注目されている分野の一つです。しかし、課題もあります。特に地方は資金力のある大きな企業が少なく、せっかくの研究成果や計画もなかなか結実しないことがあります。

また、南條教授は「新しい学問なので、この分野はまだまだ人材不足」と指摘します。

「したがって理工学的な専門知識をもった人が行政にも企業にも少なく、構想や計画の立案だけで終わってしまいがちなところがある。本学はそういう面を補うためにも、人材育成と共にもっと積極的に参画して実働部隊の先頭として動いていきたい」

南條教授は来年3月で本学を定年退職します。しかし、「この地に骨をうずめたい」と津軽と本学への愛情を表現します。

「津軽は文化的にも歴史的にも革新の種のある地域だったと思う。前述の資金の問題や人材の問題など、さまざまな課題もあって新エネルギーの研究や開発は難しい面も多いが、革新的な地にあって、常に新しいものを求めていこうという意欲の高い弘前大学は、それだからこそ積極的に取り組んでいくべきだと、私は思うのです」

南條教授は、こう熱く本学にエールを送ってくれました。

イベント告知板

【公開講座等】(有料)

講座名	日時	会場	募集人員/受講料	問い合わせ先
リンゴを科学する	12月1日(土) ~3日(月)	板柳町 多目的ホールあぶる	リンゴ農家 及び関係者 100名 1,000円 (送料別)	弘前大学篠崎農場 TEL:0172-75-3026
弘前大学公開講座 「今、アジアの動きが おもしろい」	11月30日(金) 12月7日(金) 12月14日(金) 18:30~20:00	八戸市公民館	一般 40名 3,000円	生涯学習教育研究センター TEL:0172-39-3148 sgcenter@cc.hirosaki-u.ac.jp

【講演会・セミナー等】(無料)

講座名	日時	会場	募集人員/受講料	問い合わせ先
遺伝子実験施設 セミナー	不定期に開催	遺伝子実験施設	一般 大学教職員 学生 無料	弘前大学遺伝子実験施設 TEL:0172-39-3891 grc@cc.hirosaki-u.ac.jp
生涯学習講演会 「健康をテーマに 考える社会教育講座」	1月15日(火) 2月19日(火) 3月18日(火) 18:30~20:30	会場未定(風間浦村)	一般 定員未定 無料	風間浦村教育委員会 TEL:0175-35-2210
生涯学習講演会 「学校におけるいじめの 構造と克服の路」	2月21日(木) 18:30~20:00	弘前大学八戸サテライト 弘前大学医学部 コミュニケーションセンター (テレビ会議システム使用)	一般 30名 無料	生涯学習教育研究センター TEL:0172-39-3148 sgcenter@cc.hirosaki-u.ac.jp

津軽三味線サークル

津軽三味線サークルは、発足三年目で、部員は四年生から一年生まで合わせて約三十人程います。練習は週に二回あり、月曜日組と水曜日組に分かれて皆で仲良く行っています。大学に入ってから津軽三味線に初めて触れた人が多数いたりなど、初心者大歓迎のサークルです。

主な活動としては、「総合文化祭での演奏」、「リンゴ公園での演奏」、「弘前さくらまつりでの演奏」など年々活動範囲を広げています。

せっかく青森県まで来ているんだから、青森の伝統芸能である津軽三味線をやってみたいけど、三味線って高いんじゃないの?と思っているソコノ君!三味線は高いものだけど、三味線を借りているので買う必要はないのです。なので心配せずに、まずは見学してみてください。最近では、自分の三味線(マイシャミ)を購入する熱烈な三味線ファンが出て来ています。



皆さんも三味線に触れて、愉快的な仲間をいっぱい作りませんか?皆さんの見学・入部を楽しみにしています。

国立大学法人弘前大学の役員報酬・給与等について(概要)

国立大学法人弘前大学では、総務大臣が定める「国立大学法人等役員報酬及び職員給与水準の公表方法等について(ガイドライン)」に基づき、役員報酬・給与の水準を公表しております。

公表内容の詳細につきましては、「弘前大学ホームページ <http://www.hirosaki-u.ac.jp/>」の「組織情報」のページをご覧ください。

◎役員報酬等について

役名	平成18年度年間報酬等の総額			就任・退任の状況	
	報酬(給与)	賞与	その他(内容)	就任	退任
法人の長	19,302	13,704	5,547	51(寒冷地手当)	
理事(5人)	62,497	44,340	16,994	168(調整手当) 24(通勤手当) 564(単身赴任手当) 407(寒冷地手当)	4月1日1名
理事(非常勤)(0人)			()		
監事(1人)	9,334	7,104	1,914	265(通勤手当) 51(寒冷地手当)	4月1日1名
監事(非常勤)(1人)	210	210	()		

●「調整手当」とは、民間における賃金、物価及び生計費が特に高い地域に在勤する役員に支給されているものである。

◎総人件費について

区分	当年度 (平成18年度)	前年度 (平成17年度)	比較増△減	中期目標期間開始時 (平成16年度)からの増△減
給与、報酬等支給総額(A)	11,544,281	11,718,972	△174,691(△1.5%)	△52,146(△0.4%)
退職手当支給総額(B)	1,224,693	1,218,154	6,539(0.5%)	133,849(12.3%)
非常勤役員等給与(C)	1,517,389	1,448,472	68,917(4.8%)	56,451(3.9%)
福利厚生費(D)	1,636,482	1,623,214	13,268(0.8%)	45,255(2.8%)
最広義人件費(A+B+C+D)	15,922,845	16,008,812	△85,967(△0.5%)	183,409(1.2%)

◎職員と国家公務員及び他の国立大学法人等との給与水準(年額)の比較指標

(事務・技術職員)	
対国家公務員(行政職(一))	86.6
対他の国立大学法人等 (教育職員(大学教員))	97.2
対他の国立大学法人等 (医療職員(病院看護師))	96.3
対国家公務員(医療職(三))	93.7
対他の国立大学法人等	95.8

(注)当法人の年齢別人員構成をウエイトに用い、当法人の給与を国の給与水準(「対他の国立大学法人等」)においてはすべての国立大学法人等一つの法人とみなした場合の給与水準)に置き換えた場合の給与水準を100として法人が実際に支給している給与水準から算出される指数をいい、人事院において算出。



稲村 千穂

株式会社陸奥新報社編集局報道部
人文学部人文学科卒業 (2001年3月)



陸奥新報社に入社し6年目。現在弘前大学担当として、構内を歩かせてもらっています。

卒業して7年の間に弘大を取り巻く環境は一変。国立大学法人弘前大学には、懐かしさよりも、外観の変化も含め驚きが勝りました。入学式や卒業式、総合文化祭という節目の行事をとってみても、学生のみならず教職員も一体となって盛り上げる雰囲気、戸惑いながらも取材にやりがいを感じています。

新聞記者として社会人になりましたが、在学中の私は、人とかわかることを避ける学生でした。講義を通し、本を読み、新たな視点に気付き考える楽しさを味わう一方で、友人の輪を広げ、教員と積極的に語り合うことができず。専攻は西洋古代思想でしたが、対話という形で残る哲学者たちの言葉に、学ぶ原点を感じながらも、一歩も踏み出せないうまま。「もう少し勇気を出していれば」という後悔がいつもつきまとっていました。

現在も性格には変化はありませんが、この後悔がある分、どんなときもとにかく直接会って、話しを聞くことを心掛けています。仕事柄時には無神経だと怒鳴られることも、勉強不足を叱られることも。ですが、面と向かって話しを聞くことは、嫌でも言葉のやりとりがあります。そこで得られるもの大きさを、やっと実感できるようになりました。

新聞記者となり、弘大に通う中で、弘大生の部活動や研究、留学など多彩な活躍を追い、日々の生活や弘大への意見などを聞く取材が一番の楽しみです。出会った学生にとって、たとえそれが苦い思い出としても、将来どこかで一歩踏み出す力となるだろうことを願いながら、弘大生として抱いたその思いを記事にできるのは、弘大担当の醍醐味だと思っています。

編集後記

今号から「ひろだい」編集を担当いたしました。周りに編集の事を知っている人が誰もいない状態で、要領のつかめないまま、恐る恐る先生、学生等の方々にインタビューを依頼しつつ、思うように作業が進まない状況に焦りながら学内トピックス等の原稿を書き上げ、どうにか形にすることができたが、いかがだったでしょうか。今号は「進化する弘前大学」ということで、地域共同研究センター、国際交流センター、弘前大学出版会の活動の特集させて頂きました。教職員、地域にまで守備範囲を広げた国際交流、産学官金との連携、教育・研究成果の全国・世界への発信と、各々のこれまでの活動・成果及びこれからの抱負について熱く語る先生たちの姿に心打たれると同時に、目標とする「世界に通じ、地域に開かれた大学」に向かって一層力強く突き進む本学の姿が予感され、広報を扱う者の端くれとして、その姿をより気持ちよく込めて発信してゆかねば、と感じました。

さて、学外の皆様方に、本学の姿を広くお知らせする目的で創刊された「ひろだい」も、おかげさまで第10号の発行を迎えることができました。これもひとえに応援して下さい皆様のおかげです。この場を借りて厚く御礼申し上げます。

(伊藤◎総務部総務課)

ひろだい vol.10 2007年11月発行

表紙:教育学部附属中学校 校舎時計

弘前大学総務部総務課

「ひろだい」に関するご意見・ご感想をお聞かせください。
「ひろだい」はWebでもご覧いただけます。下記URLから「大学案内」へお進み下さい。



弘前大学

〒036-8560 青森県弘前市文京町1番地
Tel.0172-39-3012 Fax.0172-37-6594
E-mail: jm3012@cc.hirosaki-u.ac.jp
<http://www.hirosaki-u.ac.jp>